平成２０年５月発行　No.２１

子どもと造形

児造研ニュース

児童造形教育研究会機関紙
編集・発行人　長尾宏一
事務局　〒111-0051
台東区蔵前３－20－２クレパスビル内
TEL　03(3862)3937

第32回児童造形教育研究集会

「図工で育てる子どもの力」 －子どもの活動から見る新学習指導要領－ をテーマに

児童造形教育研究会　会長　長尾　宏一

つい先日、５年生初めの図工の学習で、「私の見つけた春」(絵に表す)に取り組みました。私の見つけた春ですから、春を感じるものならなんでもいいのです。まず思い浮かぶのは花ですが、子どもたちはそれ以外にもいろいろなものを見つけます。

虫、鳥、魚、空、水、風・・・中には「ネコだって春をかんじるよ。冬はあまり動かないでじっとしているけれど、暖かくなるとよく動き回っているよ。」と言うＡさん。また、「人が着ている服だって、春らしくなるよ。」と子どもたちの考えは広がっていきます。

図工室から出て絵を描き始めたＢさんが、「先生、ここにはないものを自分の想像で描いてもいいですか？」と聞きに来ました。勿論、「いいよ。自分が春を見つけたことから想像を広げて描くことは、すてきなことだよ。」と言葉を返しました。そうした子があちこちにいて、楽しそうに描いているのです。

見て描くことに終始しないで、自分でイメージを広げていく子どもたち。見たままに描く学習に価値をおいて指導していたら、このような子どもたちは育たなかったでしょう。見て描くことも大事ですが、 見て感じたこと、考えたことを自ら意欲的に表現する子を育てたいと思います。

今回の学習指導要領における改訂のポイントとして、次の３つを学力の重要な要素として示しています。

①基礎的な知識・技能

②知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力

③学習に取り組む意欲

これらは、この５年生の子どもたちの活動から見てとることができます。

今回の児造研の研究会では、普段の図工室で展開される子どもたちの活動を記録したビデオを見ながら、新しい学習指導要領が目指す「生きる力」を明らかにしてみたいと思います。また、いくつかの実技研修を通して、どのように指導をすればいいのか、図工で育てる子どもの力はどんなものなのか、みなさんで一緒に探ってみたい思います。

ぜひ、夏の研究会に参加していただき、新しい学習指導要領を、そして造形活動のすばらしさを体感してみて下さい。

今年のテーマ：「図工で育てる子どもの力」によせて
・・・実技研修会にむけてスタッフからのメッセージ

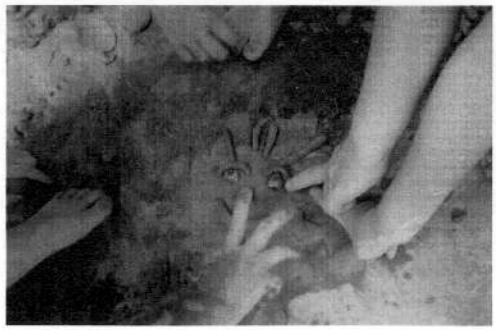
今回の学習指導要領の改訂に思うこと

安倍啓斎

今回の改訂は、これまでの「生きる力」の育成を一層充実するための改訂といわれています。その中でも私が興味を引かれたのは言語に関する能力の育成との関連です。「鑑賞活動に於いて自分の作品などについて説明したり…」と解説されていますが、やはり大切にしたいのは図工としての言語である「**色、形、材質感**での表現＝造形言語での伝え合い」です。自分が表したいことへのこだわりが深まれば深まるほど、色や形なども充実し、私の色、僕の形が生まれてきます。そして、「改訂の課題」などで使われている「**自分なりの意味**」が生まれると考えます。その表現したい思い＝自分なりの意味を友達に伝えたいと思うとき、いわゆる言語も充実してくるのではないでしょうか。

保護者の関心事は英語や国語、算数など、いわゆる主要教科の学力向上に向かいがちな昨今ですが、PISA型の思考力などを考えれば考えるほど、図工で培われる拡散的で柔軟な思考や直感力は重要ではないでしょうか。

本年度、私の勤務校では校内展覧会の年にあたります。子ども同士のかかわり合いのある造形活動を様々な形で実践していきたいと思っています。その活動を通して、もう一度、図工から見た言語力を考えてみたいと考えています。



もえちゃんの一日

石賀直之

幼稚園にバスが迎えにくるまでしばらく待ち時間がありました。入園したばかりのもえちゃんは行儀よく待っていましたが、テーブルの上に紙とクレパスがおいてあるのをみつけました。もえちゃんはテーブルのところに行き、クレパスでぐるぐるとかきはじめました。ぐるぐるとかいた跡はやがてもえちゃんの顔になり、もえちゃんのおじいちゃんの顔になってきました。

しばらくするとテーブルに男の子がやってきました。もえちゃんが夢中になっている様子がわかったのでしょう。男の子もクレパスを持って紙にむかいました。男の子はクレパスを両手で持って紙に点々をつけました。

トントントントン・・・・

部屋中にクレパスの音が響きます。その音を聞いてたくさんの子ども達が集まってきました。みんなクレパスを持って点々をつけ始めました。

トントントントントントン・・・・

いつの間にかもえちゃんの顔も点々になり、もえちゃんのおじいちゃんの顔も点々になりました。

「もえちゃんのかいた顔だからだめ～。」

と言っていたもえちゃんですが、最後はもえちゃんもみんなと一緒ににこにこしながら画面いっぱいに点々とぐるぐるをかいていきました。

いつの間にかバスが着ました。もえちゃんはにこにこしながらバスに乗り込んでいきました・・・。

私が立ち会った実話です。形や色、出来事が人をつなげていきます。造形活動をすることとはその行為そのものが社会と関わることなのです。

ためにする ／ したいからする

大泉義一

「ためにする・do it for」という考え方があります。ここでは，何らかの目的が予め設定されていて，それに向けて直線的に物事を行っていく様子が想起されます。この「do it for」という考え方は，図工の授業でも結構見かけることができます。しかしながら，子どもたちの側から「つくる・かく」という営みを眺めてみると，必ずしもそうではないことが伺えます。そこではむしろ，「したいからする・want to do it」という考え方が中心にあります。ある日，休み時間になっても，粘土のモンスターづくりを止めようとしない太郎がいました。彼の姿は，どこかに目的があって現れているというよりも，まさに彼の「want to do it」姿そのものであると言えるでしょう。

さて新しい学習指導要領では，「共通事項」が新設されましたが，新しい事柄だからといって心配は無用です。図工の教科目標には，「つくりだす喜びを味わう」とありますが，まさにこの「喜び」の内実が，「共通事項」の内容，すなわち，①自分なりに色や形などをとらえる，②とらえたことをもとに自分なりのイメージをもつ，なのです。

先の太郎は，「want to do it」という状況の中で，「粘土の感触に親しみながら，そこから次々に生み出される形や色に面白がっている」のであり，それが彼の「つくりだす喜び」なのでしょう。そしてそれが，我々教師が大切にしてやりたい子どもの姿なのです。

このように，教科目標にある「つくりだす喜び」は，「ためにする・do it for」ではなく，「したいからする・want to do it」ことの中で，形や色などと関わりながらイメージをふくらませることで実現されていくのです。

技能が先か？ 意欲が先か？

北川智久

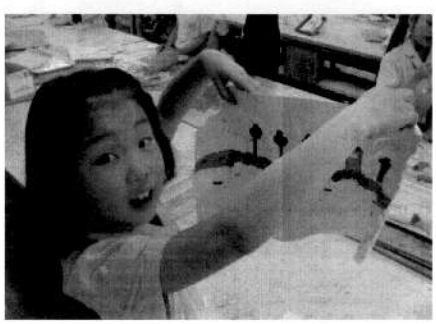
学校の先生には、たいへんまじめな方が多いと感じています。それは、自分の職場でも、他の地域に訪問したときも同じです。児童に対する一定の指導に対して、一定の伸びを期待するというあたりまえの指導を毎日続けています。とても大切なことです。

造形活動の指導においてはどうでしょう。上記のようなまじめな先生方は、最終的に作品が展示されたときの様子をまず思い浮かべます。子どもたちにどのような一定の伸びがあったかが作品にはっきり表れやすいからです。そのため、ついつい指導が細かくなります。どちらかというと、技法・技能の積み上げタイプの指導になります。その結果、全体として作品の質が高くなりますが、もう一方では、「指導色が濃い」「子どもの個性が薄い」という見方もできます。

保護者も賢くて、隣のクラスとわが子のクラスを見比べて、担任の指導力がどうのこうのと評価しているようです。‥‥なんとも、日常のみなさんの悩みを蒸し返しているようで申し訳ありません。

子どもには、技能の積み上げも大切ですが、もっと大切なのは、活動へのイメージや作品へのあこがれなどに後押しされた「意欲」だと私は考えます。意欲があれば、かなりの技法・技能は教えるまでもなく子ども自らの手で獲得されていきます。教師は見守り、サポートしていけばよいのです。ただ、一直線型の指導ではない分、子どもの要求に応じた指導力が必要になってきます。その点は、当研究会で身に付けてください。お待ちしています。

「あら、○組の方が、子どもたちの作品が生き生きしているわね。個性が光ってる。」と見てくださる保護者もたくさんいますよ。



今，必要なこと

中村哲夫

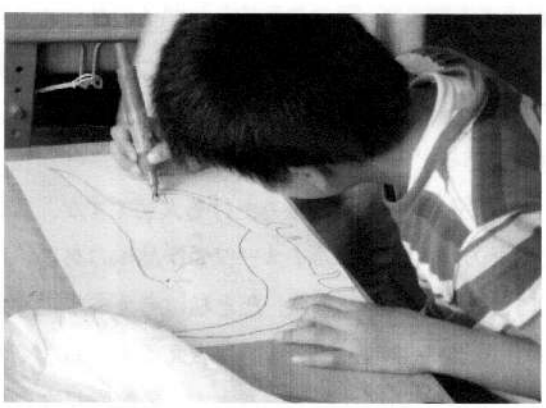
児造研（児童造形教育研究会）が誕生して，30年になります。この研究会は，図工教育に対して，様々な面からいろいろな提案を投げかけてきました。

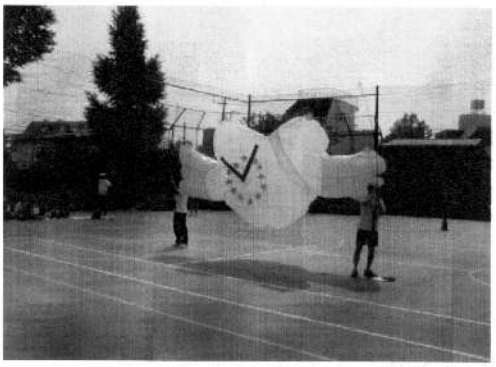
それでは今，何が必要なのでしょうか？

一つには，「子どもとともに生きること。」

図工・美術から，子ども達にどんなことを働きかけ，どんなことを引き出してあげるか。それが大切なことだと思います。

今年の大会で，みなさんとともに考えあうことができればと思います。





私たちが「意味発見」の旅に出る理由

名達英詔

私たちは様々な色や形に包まれながら生活をしています。そして、ほとんどの場合、そうした色や形は組み合わされており、動きを伴っています。ちょっと周りを見渡してみてください。破れ目のない色と形の組み合わせが見えてくると思います。そして、そうした組み合わせが動きを伴った変化の中でもやはり破れ目を見せないことにも気付きます。私たちは、この無際限な色と形が織りなす事象に対して、自分たちが生まれ、成長する過程の中から経験的に得た意味を持たせ、時々に必要なところに目を向けながら生活を組み立てているわけです。

意味を帯びた色や形などによって組み立てられている私たちの生活。その生活は豊かであって欲しい、みずみずしくあって欲しい、と誰もが思います。では、どうしたらそのような生活が形になるでしょう。その鍵の一つが先程来お話ししている色や形などの意味づけにあると思うのです。何故なら、生活を組み立てる材料としての色や形などのとらえ方、意味の帯び方が豊かであればあるほど組み立てられる生活も豊かになると考えるからです。色や形などに沢山の意味を発見したり、逆に沢山の意味を帯びた色や形などを創り出したりする方法を知っている、そして、それを利用した生活を自然体で組み立てる。そんな生活者がつくりだす豊かな日々。造形活動を通して子どもたちに育てたい資質や能力は、こうした未来を創り出すものです。

私たち大人は、往々にしてルーチンワークとしての生活の中にいて、効率の良い既成概念から離れられません。子どもたちの未来を語る為にも、色や形などが織りなす世界の「意味発見」の旅を、まず私たち大人が行ってみるべきではと思うのです。

主体性と調整力を育てよう

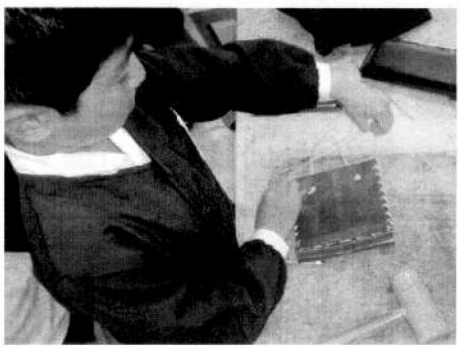
橋本光明

図工で育てる「子どもの力」は，学校で育てる「子どもの力」の重要な部分を担っています。この「子どもの力」は，昔から言われてきた「人間形成力」です。「人間形成力」は，「個性化」とその個性を集団や社会の中で調和させる「調整力」です。

「生きる力」は，この「個性化」と「調整力」を現代版に修正したものです。すなわち，「生きる力」を育む現在では，人は「一個の独立した人格を持つ存在」とされ「個性」が「主体性」に置き換えられました。
しかし，「主体性」が「支援」旋風の巻き起こる中で「自主性」に取って代わり，「教えてはならない症候群」が流行り，今，その行き過ぎを反省しています。

一方の「調整力」は，「自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心など」の「豊かな人間性」の育成へ向かっていきました。その調整力が働くときには，感覚力や想像力，思考力，洞察力，判断力，表現力などが生き生きと発揮されています。ですから文科省の「思考力・判断力・表現力」は，「人間形成力」に欠かせない「調整力」といえます。

以上のことから，図工の「子どもの力」について，「主体性」では，①人間が人間たる所以である夢や希望，想像，発想などを大事にする。②感情や感性など感覚情報の幅を広げる。③潜在的な能力を引き出す。④複眼的，多視的な見方考え方を大事にするなどです。
「調整力」は，①表現には，相手が気付かない要素や，偶然に生じる要素などがあり，それを契機に関係性が生じることに気付く。②表現・鑑賞によって互いの思いや考えなどを伝え合い，分かち合うことを理解する。③規範や既成，条件などの中で，最大の可能性や豊かな創造性を発揮できるように配慮していくとよいです。



「みる」ことと「描く」ことが一緒になると…
表現と鑑賞の一体化の試みとは？

林　耕史

図画工作科の内容的な領域は，「表現」と「鑑賞」です。でも，今から３０年以上前の図工は，「絵画」「彫塑」「デザイン」「工芸（工作）」，そして「鑑賞」の５領域でした。一般的な美術のカテゴリーを教育の場面にもあてはめていたわけです。この当時の学習指導要領の下で育った方もいらっしゃると思います。かくいう私もそうでした。そのころをふり返ると，確かに写生画や粘土，紙工作やポスターなどと，はっきりしたわかりやすい作品ばかりが思い出されます。

しかし，既に美術界に見られた様々な表現は，当時でさえも，決してこのようなわかりやすい分類ではなかったはずです。そして，造形活動の視点を社会規範としての５領域からではなく，子どもの造形活動の目線に寄り添う必要がありました。こうして「表現」と「鑑賞」という２領域になったのが３０年前です。

それ以来，図工はこの２領域で語られることが前提となりました。この春告示された，新しい学習指導要領も勿論同じです。ですが，私は思うのです。もしかしたら，「表現」と「鑑賞」に分けるということ自体も考え直すべきかも知れないと。

私たちは，例えば，「絵」をみているとき，確かに絵筆は持っていませんから「鑑賞している」と言うことができるでしょう。でも，それは絵筆を持っていないだけで，本当は自分の内部で，新たな映像・独自の画面を描いているのではないでしょうか。「感じ取り自分のイメージをもつ」という行為です。「表現」と「鑑賞」とに分けているのは，子どもたちの学習の姿の評価のための形式であって，実はそもそも一体のものなのかも知れません。こうして考えてみると，「これが表現の授業です」とか「今日は鑑賞です」と分けることは，学習の主体である子どもたちにしてみれば，あまり意味をなさないでしょう。

ここに「鑑賞」と「表現」を一体化した授業の可能性が見えてきます。今回の夏の実技研修会では，その試みをみなさんと一緒に行いたいと思っています。昨今話題の「読解力」も，図画工作科における子どもの姿で語ることができると思います。是非，体験してみてください。

『発達段階に応じた○○○』

○○○＝活動の保障

平田智久

○○○＝活動の保障は、まさに“乳幼児期から児童期への発達や学びの連続性を確保する”ことです。

しかしその連続性の確保は簡単にできそうにありません。「何歳だから･･･」といった発達観では子どもひとりひとりの姿に対応できません。ひとりの子どもを考えてみても<発達の観点>だけでなく、<経験の有無><個性><興味関心><心情>…などを考慮しなければならないからです。そのあたりの配慮が“学習指導要領”と“幼稚園教育要領＝保育所保育指針”と大きく異なっているところです。

幼小の連携を考えている今、ある小学校の先生に質問されました。「連携を考えたいので幼稚園の教科書を見せてほしい」と。まさに学年で輪切りにされた発達観です。乳幼児期の活動は、何年では△△を扱う…何年になったら◇◇を経験する…といった考えではないのです。子どもの<興味関心><心情>などが優先されます。絵の内容も取り組みも子ども自身の<興味関心><心情>から生まれます。子どもと保育者(教師)との信頼関係も、子どもを知ること、受け止めることから生まれます。友だちとの関係も同様です。そうした活動(行動)の中で「健康」も「人間関係」も育もうというのが“教育要領＝保育指針”であり、現実の保育なのです。

素材と向き合うことから始まる《図工》は、他の教科と違ってひとりひとりが見えています。授業の観点を少し変えてみると、子どもの<発達><経験の有無><個性><興味関心><心情>などが把握できます。

その情報こそ子どもと関わるために必要なことであり、人間教育の要です。幼小の連携は《図工》から始めることが一番重要で確実な道です。

「図工は評価が難しい」とお困りのあなたに

ギャラリートーク（対話型鑑賞法）の進め

堀井武彦

児造研の夏の研修会のアンケートやざっくばらん討論会で参加者から寄せられる質問で多いものの一つに「作品をどう評価したらいいか判らない」「結果ではなく過程を評価しなさい。と言われるけれど…」という参加者の声と出会います。

答は簡単です。「子どもが何を表したかったか？」ということを読み取ればいいのです。この質問をされる先生方の多くは、おそらく「自分は美的センスが無い。造形作品の良し悪しを測る審美眼に自信が無い」と悩まれているのではないでしょうか？

私事で恐縮ですが、私は美術大学で油絵を専攻し、図工専科として教職に就きました。当時、「自分は子どもの作品を幅広い物差しで評価できる」という自信をもっていました。ギャラリートーク（対話型鑑賞法）という手法と出会う、つい最近までその思い上がりは消えませんでした。恥ずかしながら、空疎な過信や専門性という鎧を拭い去るのに２０年近く時間を要したことになります。子どもの表したかった気持ちに寄り添ってこなかったのです。

では、具体的に、ギャラリートークの手法でどのように「子どもが表したかった気持ち」を読み取っていくのか？ここでは、ギャラリートークが日本に広がるきっかけとなった米国の美術史家アメリア・アレナスの有名な台詞の紹介にとどめます。

「ここでは何が起こっていますか？」

続きは夏の研修会でのお楽しみ。難しくありません。世界的に優秀な日本の小学校教師ならば誰でもすぐに実践できます。ひょっとしたら図工以外の場面では実践されていらっしゃるかも...。

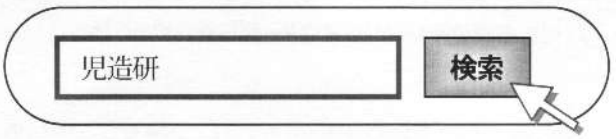
児造研のホームページをご覧ください！

今年の研究集会のご案内や，これまでの研究の様子など，ご覧になれます。

アドレスは下記のとおりです。

http://www.geocities.jp/jizouken/index.html

「児造研」「児童造形教育研究会」で検索してもOKです！



2007年　昨年の大会の様子から

昨年の大会も，今年と同様，東京学芸大学附属竹早小学校で行われました。

研究会顧問，横浜国立大学名誉教授である宮坂元裕先生による講演をはじめ，実技研修など，大いに盛り上がりました。

宮坂先生による講演『造形教育という考え方』

実技研修Ａコースの様子

実技研修Ｂコースの様子

実技研修Ｃコースの様子

実技研修Ｄコースの様子

子どもコーナーでも元気に！

サクラ 工作ポスターカラー

SAKURA

いろいろなものに描ける!! 水で洗い流すことができる（非吸収面）

環境にやさしい容器で新登場

ちきゅうにやさしい

プラスチックの再利用81%

容器認定 第04112104号

再生ポリエチレンを使用したエコマーク認定
260 mlポリチューブ 包装容器の端材のリサイクル（再生材使用率81%）

- 鮮やかな発色のポスターカラーです。
- 絵の具の小分けがしやすいポリ容器入りです。

配色表

色名	しろ	レモンいろ	きいろ	やまぶきいろ	だいだいいろ	うすだいだい	おうどいろ	ちゃいろ	こげちゃ	しゅいろ	あか	きみどり	みどり	みずいろ	あお	ぐんじょう	あいいろ	くろ	ももいろ	むらさき
色番#	50	2	3	4	5	7	15	12	17	18	19	27	29	125	36	38	43	49	20	24
260ml単色	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
12色セット	●		●		●	●		●			●	●	●	●	●			●	●	
720ml単色	●		●		●	●		●			●	●	●	●	●			●	●	

このマークは、環境省の指導のもとで財団法人日本環境協会が認定を行っており、社会や家庭生活における環境負担を減らす、または環境保全に役立つ商品に与えられます。

国際の各機関・地方公共団体・事業者・国民が環境物品などの調達を推進することにより、環境への負荷が少ない持続発展が可能な社会の構築を図ることを目的とした法律です。このマークのある商品はグリーン購入法特定調達品目の判断基準に適合している商品です。

商品名	略号	品No.	小売価格	梱入数
サクラ 工作ポスターカラー（260 ml単色）	KPW#	——	682円（本体価格650円）	12コ
サクラ 工作ポスターカラー12色セット	KPW12	878182	8,190円（本体価格7,800円）	1コ
サクラ 工作ポスターカラー（720 ml単色）	KPW720ML#	——	1,890円（本体価格1,800円）	6コ

株式会社サクラクレパス

大阪 〒540-8508 大阪市中央区森ノ宮中央1-6-20 TEL(06) 6910-8800 (代)
東京 〒111-0051 東京都台東区蔵前3-20-2 TEL(03) 3862-3911 (代)
札幌営業所 (011) 622-1720 (代) 仙台営業所 (022) 374-3860 (代)
名古屋営業所 (052) 991-7641 (代) 広島営業所 (082) 263-9868 (代)
九州営業所 (092) 474-1182 (代) http://www.craypas.com

■ご用命、お問い合せは……

PRINTED WITH SOY INK
このリーフレットの印刷は環境にやさしい植物性大豆油インキを使用しています。

R100

JAB EMS Accreditation

SGS

大阪工場 SGS/J/E098

KPWリーフレット 0505190D

8